

コーパス言語学と国際英語関連分野 (EIL、WE、ELF)の学際的領域

— 英語使用者コーパスの必要性 —

藤原 康弘

概要

本稿の主たる目的は、a) コーパス言語学、b) 国際英語関連分野である
1) 国際語としての英語 (English as an International Language: EIL)、
2) 諸英語 (World Englishes: WE), 3) 国際共通語としての英語 (English
as a Lingua Franca: ELF) の各分野の歴史的背景を概括し、それぞれの
経緯から生じる研究目的、研究領域の差を俯瞰し、a)、b) の両者の学際
的領域の変化を論じる事である。その分野間の差異は近年着目されている
「言語使用者」(Cook, V, 2002) の捉え方、及び「学習者」、「使用者」の
区分に反映されており a) の伝統的主流を受け継ぐ領域では、Kachru, B
(1992) の述べる内円 (NS) と外円／拡大円 (NNS) 間、b) の諸英語論で
は内円／外円 (established/institutionalized) と拡大円 (performance,
norm-dependent) 間で、使用者、学習者を区分している。

即ち、上記分野では、拡大円に属す日本の英語使用者は、実態がどうあ
れ、「使用者」ではなく母語話者規範を順守すべき従順な「学習者」とし
て区分され (Seidlhofer & Berns, 2009)、どれほど卓越した言語話者のサ
ンプルであれ「学習者」コーパス内に編纂されてきた (e.g., 藤原, 2006;
Fujiwara, 2007b)。一方、EIL/ELF においては分け隔てなく、母語性、
制度性に関わらず言語話者を使用者 (時に学習者) と概念化しており、主

として ELF 使用者コーパス構築のプロジェクトが行われてきたことを示す。筆者は 2005 年より「日本人英語使用者コーパス」(藤原, 2006; Fujiwara, 2007b) を編纂してきたが、この各分野間の差異により、国際英語関連領域ではコーパス言語学的手法による研究は未だ多くなされていないため (Bolton & Davis, 2006)、今後一層拡大円における「英語使用者コーパス」編纂の必要性があることを主張する。

1. コーパス言語学

コーパス言語学の歴史は、Leech (1991) によると、英国ロンドン大学での The Survey of English Usage 計画 (1959 年開始: 以下、SEU)、米国ブラウン大学での Brown Corpus 編纂計画 (1961 年開始) に始まる。その後、合理主義に基づく生成文法の台頭による停滞、閉塞を経て、1980 年代前後より Lancaster-Oslo/Bergen Corpus of British English (LOB: 1978 年完成)、British National Corpus (1994 年完成) 等の主要コーパスが編纂され、以降、言語学、第二言語習得論、応用言語学に継続して多大な貢献を為してきた (詳細は齊藤, 2005 参照)。

コーパス言語学を簡潔に定義するならば、「現実世界の言語運用の事例に基づく言語研究」(McEnery & Wilson, 1996, p. 1) であり、今日ではコーパス、即ち言語集積体はコンピューター・テクノロジーの普及に基づき、機械可読化 (machine-readable) されたものを指す。また Leech (1992; 齋藤, 2005, p. 4) によると、コーパス言語学は次の 4 つの特徴を有する。

- 1) 言語能力 (linguistic competence) よりも、言語運用 (linguistic performance) に中心をおく。
- 2) 言語の普遍的特性 (linguistic universals) の解明よりも、個別言語の言語記述 (linguistic description) に中心をおく。

- 3) 質的な (qualitative) 言語モデルのみならず、数量的な (quantitative) 言語モデルにも中心をおく。
- 4) 言語研究における合理主義的 (rationalistic) な立場よりも、より一層経験主義的 (empirical) な立場におく。

上記の 4 特徴から見出されるように、対照してある言語能力、普遍的特性、質的言語を重視した合理主義的立場を特徴とする言語研究分野である生成文法 (Chomsky's works) とは相対し、コーパス言語学は経験主義的立場をとり現実世界の言語運用を記述し、質的だけでなく量的に言語分析を行う領域として発展を遂げてきた。従って、上記に明示された対立的特徴を有するものの、コーパス言語学の黎明期における目的は生成文法において過剰に重視された「母語話者直感」を補うことであるため (McEnery & Wilson, 1996, p. 25)、研究焦点は内円における母語話者英語にあり、インド英語、シンガポール英語等の外円、日本英語、中国英語等の拡大円の英語は全て「非母語話者英語」として主とした分析対象からは除外されてきた (藤原, 2006; Fujiwara, 2007b)。

後にコーパス言語学は研究目的に応じ、コーパスの種類が多様化を始める (斎藤, 2005, p. 9)。具体的には、次節で述べる World Englishes 論 (e.g., Kachru, 1986) の台頭を受け外円における英語を、第二言語習得論を背景に拡大円における英語を研究対象とし始める。まず外円における英語コーパスとして、上記の SEU の Sidney Greenbaum (1988, 1996) は the International Corpus of English (ICE) の編纂を 1990 年より開始し、彼の亡き後には Gerald Nelson に継承され、現在も当プロジェクトは進行している。その同プロジェクト内で、Sylviane Granger (1998) の牽引の下、日本、中国、フランス、ドイツ等の拡大円の英語は、付随する the

International Corpus of Learner English の下に、「学習者」のラベルをもって編纂が行われた。

この上記の区分は、コーパス言語学の主流においては本論執筆時においても維持されており、拡大円における英語はあくまで「学習者」英語として編纂がなされ、国内外で多種多様な学習者コーパスが現在では利用可能である (e.g., NICT JLE Corpus, 和泉・井佐原・内元, 2005; JEFLL Corpus, 投野, 2007)。学習者コーパスの応用により、より実証的に言語習得過程の分析が可能となり、当功績は多大なものである一方、この母語話者・非母語話者区分、使用者・学習者区分は、後に詳述するように、WE、EIL、ELF の非母語話者英語を正統な独自変種と見做す学派、とりわけ EIL、ELF の 2 領域から批判がなされることになる (藤原, 2006; Fujiwara, 2007b)。

2. 国際英語関連領域：EIL, WE, ELF

EIL、WE、ELF は交換可能な同義語と判断される場合もあるが、実際には各種異なる研究目的、研究焦点を有する (Hino, 2001, 2009; 日野, 2003, 2008, 2011; Jenkins, 2006, 2007; Berns, 2008; Seidlhofer & Berns, 2008; Seidlhofer, 2009; Pakir, 2009¹)。しかしながら、この 3 領域は、16 世紀から 20 世紀前半まで勢力を保持した大英帝国、19 世紀からの米国に牽引された英語使用の世界的拡大により (e.g., Crystal, 2003)、20 世紀後半のポストコロニアル時代における英語使用状況が変化したこと、現地英語変種の多様性と変容への認識が高まったこと、及びその対処をどのよう

¹ Pakir (2009) は EIL を Randolph Quirk の提唱する母語話者規範に依拠した International English (IE) と同義として使用しており、本論における Smith (1976) の EIL を World Englishes 内の一分野に抱合している。この抱合は EIL の提唱者である Smith (2004) 自身の認識にも合致するが、日野 (2011) が述べるように、EIL/WE は本質的に異なると解釈できる。よって本論では、EIL は IE、WE とは異なる独自の領域として扱う。

に行うかの議論に端を発することは共通する (Pakir, 2009)。

この英語の拡大化と多様化とその対処に対して最も初期になされた議論は次のようなものであった (詳細は矢野, 1990 参照)。英米の植民地から独立したインド等の各国家は現地英語変種の正当性、つまり英語を利用しつつも言語教育上のモデルとして自身の規範を使用するという言語規範上の独立をも主張し始めた。その現地英語変種の正当化に対し、英国の大方の国民は否定的立場をとったが、容認する少数派意見が有力な識者からなされた (Halliday, McIntosh & Strevens, 1964)。彼等は、イギリス英語、スコットランド英語、アメリカ英語、オーストラリア英語等、地理的・文化的差異から変種が存在することは避けがたいという認識から、第三世界におけるインド英語等の地域変種を同様に容認する見解を述べた。しかしながら、当時の ESL/EFL 専門家の多数派意見は「正統」英語の「分化」、及び「劣化」を憂い、母語話者規範を維持し、相互理解性の担保に尽力すべきというものであった。その代表者として、米国カリフォルニア大学のクリフォード・プレイター氏が挙げられる (Prator, 1968)。当初の議論は英米の英語母語話者国間のみで行われており、実際の「使用者」である非母語話者国が直接声を挙げていない事が興味深い²。この 1960 年代後半の議論を皮切りに、「異種」及び「新種」英語に対し、容認する立場を体系化した学問分野が EIL、WE、ELF の 3 分野である。以下に時系列順に、EIL、WE、ELF を概括する。

2.1. English as an International Language (EIL)

「国際英語」提唱者、主張者は歴史的には日本にも散見されたが (Hino, 2009)、今日、English as an International Language (EIL) という分野

² 非英語母語話者からの主張として、WE 論の創始者である Kachru, B. (1976) のものが嚆矢と考えられる。

にて世界的認知を得ている創始者は、多国籍社会であるハワイ、米国立東西センターに所属していた Larry E. Smith (1976, 1983) である。彼は、上記の英語使用の拡大、多様化を受け、その英語自体というよりは寧ろ言語の「使用目的」の多様化に着目し、従来の English as a foreign language (EFL: 外国語としての英語)、English as a second language (ESL: 第二言語としての英語) の概念で捉えきれない国際コミュニケーション上の使用目的の英語を English as an International (Auxiliary) Language (国際(補助)語としての英語) として提唱した (Smith, 1976, 1978)。換言すれば、イギリス英語・アメリカ英語の拡大という支配型言語観の内在于る ESL、EFL の枠組へのアンチテーゼとして (中山, 1990; 日野, 2008)、使用目的上、機能上の差異により捉えなおした言語観を提供したのである。

彼の当概念の提起における特筆すべきは次の 4 点である: 1) 英語「異種」への積極的評価、2) 英語の脱英米化の必要性 (國弘, 1970; 鈴木, 1971; Hino 2009)、3) 母語話者—非母語話者間の平等、4) 教育モデルとして母語話者規範ではなく、各地の教育を受けた変種 (educated variety) への変更 (e.g., 日野, 2011)。彼の上記の 4 点の英語観を端的に示す一節を下記に引用する。

English belongs to the world and every nation which it does so with different tone, color, and quality. English is an international auxiliary language. It is yours (no matter who you are) as much as it is mine (no matter who I am). We may use it for different purposes and for different length of time on different occasions, but nonetheless it belongs to all of us. English is one of the languages of Japan, Korea, Micronesia, and the Philippines. It is one of the languages of the Republic of China, Thailand, and the United States. No one needs to

become more like American, the British, the Australians, the Canadians or any other English speaker in order to lay claim on the language (Smith, 1976 [1983], p. 2).

即ち EIL は脱英米化した混淆の英語変種間でなされる国際コミュニケーションのための英語であり、国内語としての英語 (English as an intranational language) と機能上対を成す概念である (Smith, 1978, p. 15)。更に日野 (2008, p. 20) によれば、EIL は英語を特別視する概念でもない; つまり国際コミュニケーションに使用されるのであれば、国際タイ語、国際日本語も同様に成立する。よって国際コミュニケーション上では、言語の規模・話者数、言語を母語とするか否か (母語性)、第一言語、第二言語としての使用国であるか否か (制度性) に関わらず、1) 母語話者間、2) 母語話者と非母語話者間、3) 非母語話者間において双方が多様性を認めながら、相互理解達成に尽力すべきであること — 即ち多様性の中での統一を目指すこと — を提案している。付け加えて、その相互理解が達成される限り、各変種を積極的に推進するべく、教育モデルでさえも現地のモデル話者をターゲットとすべきであると述べている (Smith, 1983)。

以上、EIL の重要な観点を見てきた。本稿の重要概念である「学習者」、「使用者」の区分に関しては、EIL では母語話者であろうと非母語話者であろうと (母語性)、第二公用語の制度があろうとなかろうと (制度性)、状況に応じて「学習者」であり「使用者」といえる (Smith, 1978)。この点は前出の母語性を重要視してきた伝統を持つコーパス言語学、次節で述べる制度性に重点を置いた WE とは明確に異なる。

2.2. World Englishes (WE)

World Englishes (WE) は当分野の専門的国際誌の誌名 (*World Englishes*, Blackwell, 1982-) として使用されてきた故か、英語変種の記述、分析におけるアプローチの "umbrella label" (Bolton, 2004, p. 367) として理解されている場合が多々ある。しかしながら、厳密には EIL/ELF とは研究焦点は異なる (e.g., Hino, 2001; Jenkins, 2006)。

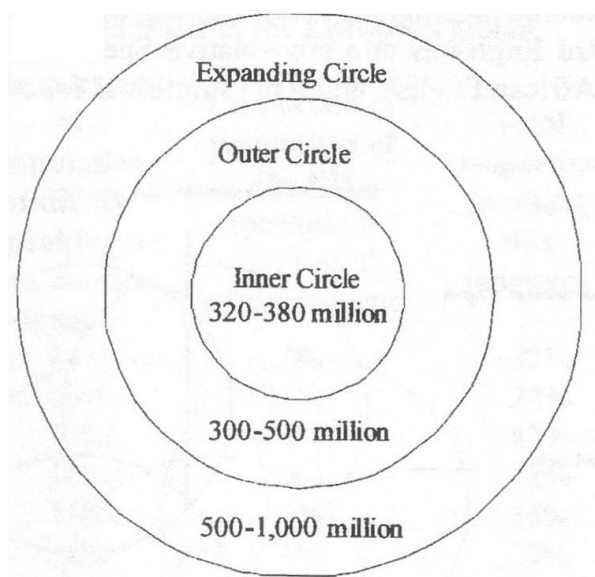
WE は米国イリノイ大学に所属するインド人である Braj B. Kachru 氏を創始者とする。彼は上記のポストコロニアル時代の英語の多様化自体に着目し、自身の出身国であるインドを含めた英米の旧植民地における土着化 (indigenization)、母語化 (nativization) を主たる関心事とした (Hino, 2001; 日野, 2003, 2008)。つまり Smith (1978) の用語を借りれば、WE は「国際語としての英語」というよりは「国内語としての英語」に焦点を当て、ESL 国家の英語が脱植民地化後、新しく担うこととなる多民族・多言語国家統一の言語機能に着目し、新英語を描写、分析し、その独自性、正統性を主張するという事を主な方向性とした (Berns, 2008)。Jenkins (2006) は、WE は "umbrella term" としてでなければ、アジア、アフリカ等の ESL 国家の new Englishes の分析を指すか、Kachru を中心とする学派の研究領域 (Kachruvian approach) を意味すると述べ、当記述と合致する。

それ故、Smith (1976) が ENL/ESL/EFL の母語性、制度性に基づく英語支配的言語観³ からのパラダイムシフトを試みた EIL の提唱とは異なり、WE は意図的ではないにせよ⁴、そのフレームワークを踏襲し、非常に良く知られた 3 つの同心円 (図 1) を提唱した。中央に位置する内円

³ 津田 (2006, p. 129) はこれらの用語を、ENL を頂点とし、ESL を中間、EFL を底辺とするピラミッド型英語支配の序列構造として、捉えている。

⁴ Kachru, B (2008) は、Smith (1978) の EFL/ESL という用語には英語使用の「正しさ」を決める審判となるのは ENL 話者 (つまり母語話者) であるという前提が見えるという主張の賢明さを賞賛していることから、この支配的言語観への認識は十分にあると考えられる。

図 1:内円、外円、拡大円(Kachru, 1985, modified by Crystal, 2003, p. 61)



(Inner Circle) は母語話者英語国家 (ENL: e.g., イギリス、アメリカ、オーストラリア、カナダ)、次に位置する外円 (Outer Circle) は植民地化による英語使用の歴史を経た第二言語国家 (ESL: e.g., インド、フィリピン、マレーシア)、最も外に位置する拡大円 (Expanding Circle) では英語を公用語としない外国語国家 (EFL: e.g., 日本、中国、韓国) を表している。

この3種の範疇に基づき、Kachru は内円の英語を *established varieties* ないしは *norm-providing*、外円の英語を *institutionalized varieties* ないしは *norm-developing* とし、前者は勿論、後者も含めていずれも安定した規範を有する確立された英語と主張する一方、拡大円の英語は *performance varieties* ないしは *norm-dependent* と称し、未だ不安定な言語規範であるため、母語話者英語規範に順ずる事が賢明であると主張した (e.g., Kachru, 1985)。つまり、本稿の重要関心事である「使用者」・「学習者」の区分において、内円・外円と拡大円間に非常に明確な線引きを行ったと言える；当区分に基づけば、インドのような第二言語国家の英語は

独自のインド英語規範を構築し享受できる一方、日本のような外国語国は、米国(ないしは英国)の言語規範を順守し、模倣すべきであり、日本語ないしは日本文化の影響を受けた「日本英語」は、程度の差こそあれ、「学習の失敗」に帰されることとなる⁵ (e.g., Seidlhofer & Berns, 2008)。

この区分の主たる理由の一つは、正に Kachru が WE を創始するにあたり重要視した項目である英語の「国内言語」としての利用の有無と言える；国内における国民的英語使用が無い場合（概ね第二公用語の制度が与えられていない場合）、英語変種が十分に発達するほどの言語使用域、及び言語機能を獲得しないと考えられるためであろう。次の引用を参照されたい。

...The Expanding Circle includes the regions where the *performance* varieties of the language (i.e., English) are used essentially in EFL contexts... varieties that lack official status and are typically restricted in their uses (Kachru, 1992, pp. 356-357, 括弧挿入筆者)。

この英語が国内ないしは地域内の様々な機能と役割を獲得することは ESL 国の New Englishes の成立要件の一つでもある (Platt, et al., 1984)。また近年では、Schell (2008) は "colinguals" という概念の提唱と共に、第一言語 (e.g., 日本語) を共有した相手でさえも第二言語 (e.g., 英語) 使用を行う事が、言語変種を生み出し安定した規範を獲得する上で必要であると述べ、国内における第二言語使用の重要性を再度強調した。上記の立場を踏まえ、彼は日本における独自の英語変種 (i.e., 日本英語) の構築

⁵ 日野 (2008, p. 29) は WE の英語母語国を中心とする大英帝国との縁の深さによる同心円の枠組みを、徳川幕府の親疎関係によって全国の藩を「親藩」、「譜代」、「外様」と分類した枠組みと非常に近似していることを主張している。

はあり得ないと主張している (p. 119)。

確かにこの国内言語使用を言語規範の発展の条件とする考え方には一理あると思われる。その主たる理由は、おそらく言語使用の狭さから、拡大円の英語、例えば「日本英語」に明確かつ実証されたモデルが未だ存在しないからである (e.g., 日野, 2008)。当関連分野における国内最大の学術研究機関である日本「アジア英語」学会の 2010 年第 26 回大会でのシンポジウムの主たるテーマは、"The possibility of Japanese English" であった。そのタイトルの "possibility" という用語から、研究者達は「日本英語」の内的規範の権利と必要性を認めながらも、現時点では共通かつ正統な日本英語変種の認識には至っていないと推察される (Fujiwara, 2010)。実際に「ジャパニーズ・イングリッシュ」をブローケンな英語として蔑む立場から、それを許容する見解 (e.g., 末延, 1990; 2010)、また達人水準に近いレベルを想定した立場 (e.g., 斎藤, 2000) まで、共通見解はみられない。また近年、国際語としての「日本英語」のモデルを先行研究に基づき構築する画期的な試みが行われつつあるが (日野, 2008; Hino, 2009)、明確かつ実証されたモデルは未だない。

しかしながら、前述のように EIL では国内使用ではなく国際使用を通じて、独自の言語・文化に適合した言語規範の可能性を認めている上 (Smith, 1981)、第二言語制度の有無によらず母語話者規範ではなく、それぞれの国の教育を受けたモデル(educated variety) を規範とする事を推奨している (日野, 2008)。また Honna (2008) は言語の拡大化を internationalization (diffusion)、多様化を diversification (adaptation) と呼び、両者は必然的に同時発生すると主張している ; つまり国際化 (拡大化) すれば、必ず多様化する (If there is to be diffusion, there has to be diversification [Honna, 2008, p. 10].)。次節で述べる ELF は、EIL と多少異なる点はあるものの、この拡大円にて国際使用される英語の独自性、

正統性、及び言語規範獲得の可能性の是認に関しては共有している。

2.3. English as a Lingua Franca (ELF)

「国際共通語としての英語」(English as a Lingua Franca: ELF) は概ね 2000 年以降、当分野内に席卷したと言って過言ではない用語である。新興分野であるため、その評価は未だ定まっていない上 (Pakir, 2009)、現在では ELF 研究者内に相当の多様性が見受けられると主張もされているものの (Prodromou, 2008)、その台頭は主として英国キングズカレッジに在籍する Jennifer Jenkins、奥国ウィーン大学の Barbara Seidlhofer の両氏によって牽引されてきたと言って良いだろう (Jenkins, 2000, 2006, 2007; Seidlhofer, 2001, 2004, 2009)。ELF は 1) 国内語ではなく国際語としての英語の機能への着目、2) 英語の多様性の積極的評価、3) 多様性の中での相互理解の達成への関心等、多くの点において、EIL と共通する。実際に、当分野の嚆矢となった Jenkins (2000) の書名は、*The Phonology of English as an International Language: New models, new norms, new goals*⁶ であり (下線筆者)、当書にて主たる関心事であった各英語変種話者間の音声面における相互理解度 (mutual intelligibility) は EIL においても精力的に研究がなされてきた分野であった (Smith & Rafiqzad, 1979; Smith & Bisazza, 1982; Smith & Nelson, 1985, 総括は Nelson, C, 2008 参照)。

しかしながら、ELF は、主たる推進者の深層の意図とは必ずしも添わず (Seidlhofer, 2004, 2009; Jenkins, 2006)、EIL と比較して次の 2 点の

⁶ 実際に Jenkins (2000, p. 11) は同書内で以下のように述べている。“(It remains to be seen whether ELF ultimately catches on. In the meantime, I will for present purposes restrict its use to describing the core of pronunciation features...as a model for international English phonology... and will continue to use the more widely-acknowledged EIL.”

特徴があると判断されてきた:1) 多様性よりは統一性を重要視 (Jenkins, 2007)、2) 母語話者を除く非母語話者間、とりわけ拡大円における英語使用者間のコミュニケーションへの過度な焦点化 (e.g., Berns, 2008; Prodromou, 2008; Pakir, 2009)。まず多様性の中の統一性の重視については、ELF の *Lingua Franca*、即ち「共通語」という用語自体が共通性を暗示しており、World Englishes という複数形が示す多様性への志向との明確な差異がある。

付け加えて、上記の Jenkins (2000) の研究成果である音声面における *Lingua Franca Core* (LFC) が共通性への志向を表している。彼女は、従来に見られた英語母語話者の音声規範の押し付けではなく、非英語母語話者間の実際に行われた国際コミュニケーションのデータから理解度を阻害する音声要因、阻害しない音声要因を分類し、前者を順守すべき「共通核」(common core)、後者を「非共通核」(non-core) として提唱した。今後、当 LFC の検証のための追調査が必要とされるものの、音韻面において母語話者による prescriptive アプローチから、非母語話者による descriptive アプローチへシフトした事 (Jenkins, 2003)、また EIL の先行研究に暗示されていた相互理解達成のための重要な音声要因を実証的かつ包括的に提供した貢献は特筆すべきものである。しかしながら、ELF はこの研究成果のため、WE の一部の研究者から多様性を軽視し、共通性、とりわけ母語話者判断の共通性を押し付けるのではとの危惧から批判がなされる程 (Jenkins, 2006)、共通性の重視という特徴を有していると考えられてきた (e.g., Berns, 2008)。実際に、後述する Seidlhofer (2001, 2004) の ELF コーパスプロジェクトは多種多様な第一言語話者を一括してデータを収集し、文法上の「非母語話者」的特徴の共通性の抽出を試みていることから、多様性というよりは共通性への志向が見られると言って良いだろう。

続いて、前述の Smith (1983) の抜粋に示されるように、EIL は母語性、制度性に関わらず言語使用者と認め、内円、外円、拡大円全ての英語の国際使用を「国際語としての英語」として分析対象としたが、ELF は母語話者を除く非母語話者間、とりわけ拡大円における英語使用者間のコミュニケーションへ過度な焦点を置いてきたと指摘されている (House, 1999; Jenkins, 2006, 2007; Prodromou, 2008; Berns, 2008; Seidlhofer, 2009; Pakir, 2009)。その主たる理由は、Lingua Franca の定義にある； Jenkins は "lingua franca" の定義を "a contact language used among people who do not share a first language, and is commonly understood to mean a second... language of its speakers" (Jenkins, 2007, p. 1) とし、ELF の最も "pure" な形態を次のように定義している。

“(I)n its purest form, ELF is defined as a contact language used only among non-mother tongue speakers” (Jenkins, 2006, p. 160).

つまり ELF の構成概念は本質的には「母語性」を除外するものであるため、「母語性」を明確に有する内円、また「母語化 (nativization)」した外円の英語は主たる研究対象から外し、拡大円に属す非英語母語話者間の国際コミュニケーションに特化した研究を行なってきた経緯がある (Jenkins, 2007, pp. 2-3)。Seidlhofer (2001, 2004) が構築の指揮をとった ELF コーパス、Vienna Oxford International Corpus of English (VOICE) では、母語話者データは 10%しか含まれていない上、他 90%はヨーロッパの拡大円の英語使用者を中心とする。この ELF を拡大円英語に矮小する傾向を、Prodromou (2010, Preface) は明確に批判し、この研究焦点は *Jenkinsian view of ELF* として ELF の研究者間の立場の多様さを訴えている。

とはいえ、彼女等 (Jenkins, 2007; Seidlhofer, 2004, 2009) は ELF コミュニケーションにおいて、内円、外円の話者は勿論含まれると述べてもいる。彼等によると、この除外の主たる理由は、内円、外円の英語使用には "non ELF forms" (Jenkins, 2007, p. 2) が含まれ、データ分析が複雑になり、「純粹」な "ELF forms" を分析するために拡大円の英語に焦点を当てる事が最善であるためと述べている。彼等が念頭に置く "ELF forms" とは次のものである。

“frequently and systematically used forms that differ from inner circle forms without causing communication problems and override first language groupings” (Jenkins, 2006, p. 161).

これを体系化し、非母語話者間、つまり彼女の述べる「共通語」のやりとり上における英語使用者の言語的参照点にすることを ELF 研究は目的としていると述べている (Jenkins, 2006)。

上記の ELF の研究目的からも Jenkins と Seidlhofer が牽引してきた、本論執筆時において ELF の主流と考えられる学派は、他関連分野と比較すると、1) 多様性よりは統一性を重視し、2) 母語話者を除く非母語話者間、とりわけ拡大円における英語使用者間のコミュニケーションへの焦点化を特徴とすると述べて良いだろう。興味深い事に、WE においては、内円・外円の英語に独自の規範を構成する特権を認め、拡大円の日本や韓国の英語には認めず、「単なる引き立て役として否定的に引用される傾向」(日野, 2008, p. 21) があつたのに対し、ELF では逆に母語性を有する内円、外円の英語を除外視 (少なくとも研究上) し、拡大円の英語を "ELF forms" を明らかにする可能性を秘めたものとして特別視する傾向にある。

またこの拡大円の英語の特別視から、本論での関心事である「学習者」、

「使用者」の区分においては、拡大円の英語話者を「学習者」ではなく、積極的に「使用者」と同定する傾向が明確にある。コーパス言語学の節で述べたように、フランス、ドイツ、オーストリア等の拡大円の英語は「学習者コーパス」として編纂がなされてきたが、ELF の牽引者である Seidlhofer (2009) が編纂した VOICE、また Mauranen が指揮した Corpus of English as a Lingua Franca for Academic Settings (Mauranen, 2003, 2007) では、データ提供者を全て「使用者」として定義している。次節では、上述のコーパス言語学、国際英語関連領域の学際的領域の歴史的発展を追う。

3. 学際的領域

以上、a) コーパス言語学、b) EIL、WE、ELF の各分野の歴史的背景を概括し、それぞれの経緯から生じる研究目的や研究焦点の差異を論じてきた。そして、その分野間の差異は近年着目される「使用者」の構成概念、「学習者」、「使用者」の区分に反映されており、a) の伝統的主流を受け継ぐ領域では内円 (NS) と外円／拡大円 (NNS) 間、b) の諸英語論では内円 / 外円 (established/institutionalized) と拡大円 (performance, norm-dependent) 間で、使用者、学習者を区分している一方、EIL/ELF においては分け隔てなく、母語性、制度性に関わらず言語話者を使用者(時に学習者)と概念化しており、主として ELF を主眼とするコーパス構築プロジェクトが行われてきたことを示した。当節では、これらの分野が互いにどのように関連し、分野間、ないしは分野内で議論が行われてきたかを詳述する。

まずコーパス言語学の母語話者中心主義は、既にほのめかされているように、非母語話者の英語使用の独自性、正統性を主張する EIL、ELF の分野のみならず、応用言語学者からも批判がなされてきた (e.g., Cook,

1999; Seidlhofer, 1999, 2001; Hino, 2001; Mauranen, 2003; Fujiwara, 2007b)。典型的な学習者コーパスを利用した研究手法は、何らかの言語項目に焦点を当て、学習者コーパスと母語話者コーパスを比較し、学習者側の過剰使用、過小使用を統計的に検出し、その過剰・過小使用、即ち「差異」を "native-like" な言語使用に近付けていない、つまり「発達」の余地のある未完成な言語であると結論付けるものである。この伝統的研究慣例は、今日においてもコーパス言語学のみならず、あらゆる領域の第二言語習得論全般に見受けられるものである (e.g., Cook, 2002, 2007)。

語彙ないしは統語上等で、明らかに未発達な学習者の言語能力を測る上で、絶対的ではなくある一つの相対的参照点として母語話者「規範」を利用することは、意義ある事かもしれない。しかしながら、第一言語・文化の影響を明確に受けた文化的アイデンティティを示す「独自」の英語使用、また母語話者、非母語話者を含めた対話者とのコミュニケーション上の問題の可能性が皆無の言語項目まで、母語話者に近づくことを「発達」とする前提は受け入れられるものではない (Fujiwara, 2004, 2007a, 2007c, 2007d)。何より、母語英語間の差異も観察されている (e.g., Nelson, C., 2008)。Cook (1999) は上記のような第二言語習得研究の典型的な手法を「母語話者謬見」(native speaker fallacy) と「比較謬見」(comparative fallacy) という誤った前提に基づいたものと述べ、非母語話者基準の言語発達モデルの必要性を訴えており⁷、コーパス言語学に関連しては次の提言をしている：“If the aim of teaching is to create L2 users, the descriptions of English that is logically required is a description of L2 English” (Cook, 1999, p. 203)。

次に実際に外円で構築された ICE、拡大円にて構築された学習者・使用者コーパスをより子細に検討したい。まず ICE とは、上述のように、World

⁷ この点は EIL 等が示す教育上のモデル変更の提言と合致する。

Englishes 論の背景を有し、構築されたコーパスであり、内円と外円の1989年以降の書き言葉と話し言葉の言語データ（各変種100万語）を収集しているコーパスである。現在以下の24地域変種を対象とし、当原稿執筆時において*で示されている変種は構築を終了し有償、または無償で公開されている⁸。

内円： アイルランド*、アメリカ、イギリス*、オーストラリア、カナダ*、
ニュージーランド*

外円： インド*、シンガポール*、スリランカ、パキスタン、フィリピン*、
香港*、マレーシア、フィジー、南アフリカ、東アフリカ*、ナイジェリア、ウガンダ、ガーナ、バハマ、ナミビア、ジャマイカ*、トリニダード・トバゴ、マルタ

ICEにより各変種の比較対象研究が可能となり、英語変種間の普遍性、独自性において知見が残されてきており (Greenbaum, 1996)、今後の更なる発展が期待される。しかしながら、このWEの制度性に基づくパラダイムでは、前述のように、日本のような英語に第二公用語等の地位を与えていない拡大円ではどれほど能力の高い多くの英語「使用者」が国内外で活躍していようとも、中学生、高校生、大学生と同様、母語話者規範を目指すことを前提とした「学習者」コーパスに所収されることとなる。Kachru, B.(1985, 1992) の指摘するように、インド等の土着化した英語と比較すると使用者数、使用域ともに限定されることを考慮しても、日本語を母語とし国内外に活躍する英語使用者は海外派遣の会社員、技術者、研究者、外交官、通訳・翻訳家、またジャーナリスト等枚挙に暇が無いにも

⁸ <http://ice-corpora.net/ice/>

関わらず、現存するコーパスは「学習者」のものに留まらざるを得ない（藤原, 2006; Fujiwara, 2007b）。また現在のテクノロジーを媒介として拡大し続ける国際コミュニケーションを考慮すれば、言語発達の要件としての「国内英語の使用」の妥当性はゆらぐことにもなる（Seidlhofer, 2009）；つまり現在の情報基盤社会では、多種多様な手法で国際コミュニケーションが可能であり、Seidlhofer (2009) は伝統的な "community"（地域共同体）という用語の再定義の必要性を主張している。

拡大円では、コーパス言語学の主流をゆく Sylviane Granger (1998) の牽引の下、編纂がなされた ICE 付随の学習者コーパス (the International Corpus of Learner English: ICLE)、ELF の見地から編纂がなされた Seidlhofer (2001, 2004) の Vienna Oxford International Corpus of English (VOICE) を皮切りに多くの学習者コーパス、また近年では幾つかの使用者コーパスの編纂がなされてきた。後者については、筆者が編纂プロジェクトを開始した「日本人英語使用者コーパス」(Japanese User Corpus of English: JUCE, 藤原, 2006; Fujiwara, 2007b)、フィンランドのヘルシンキ大学に所属する Mauranen (2003, 2006, 2008) による A Corpus of English as a Lingua Franca for Academic Settings (ELFA), Prodromou (2008) が構築した A Corpus of Successful Users of English (CSUE) は既に一定程度編纂を終えた「使用者コーパス」であり、それらを利用した研究成果が上げられている。付け加えて、Mauranen (2006) は ELFA の written 版の作成を既に始めており、豪国、グリフィス大学の Kirkpatrick (2010) は、オーストリアを中心としたヨーロッパ諸国の拡大円地域を対象とした VOICE の比較参照用コーパスとして、同様の仕様を持つアジア版 ELF 使用者コーパスの構築プロジェクトを立ち上げている (The Asian Corpus of English: ACE)。上記からも拡大円における英語話者の捉え方が「学習者」一辺倒から「使用者」へ推移しつつある事が見受

けられるだろう。

ここで、拡大円における国際コーパスの先駆者である Granger (1998)、Seidlhofer (2004)、両氏のコーパス編纂における「話者」の捉え方を比較したい。まず学習者コーパスを編纂した Granger の見解を以下に示す。

“... everybody now recognizes that there are now more non-native speakers of English in the world than native speakers. ... In this context, a project such as The International Corpus of English (ICE) is particularly welcome, as in addition to featuring different native varieties of English, it gives non-native varieties of English the place they deserve. However, ICE only covers institutionalized varieties of non-native English such as Indian English or Nigerian English. It leaves out a sizable - arguably the largest - group of non-native *users* of English in the world, i.e., foreign *learners* of English. It was to do justice to this rapidly expanding group of English speakers that I put forward a proposal to complement ICE with a corpus of *learner* English...” (Granger, 1998, p. 13, 強調筆者).

続いて Seidlhofer の見解は次のものである。

“(T)he Vienna-Oxford International Corpus of English..., while also gathering data from expanding circle *speakers* of English is different from ICLE in that it is a spoken corpus, and, more importantly that it conceives of these English speakers not as *learners* aiming at a more native-like competence, but as expert *users* of English for whom this language is the chosen lingua franca” (Seidlhofer, 2005, p. 163).

ここで特筆したい点は、1) Granger (1998) は、Seidlhofer を含めた EIL、WE、ELF 研究者と同様に、英語の拡大化とそれに伴う多様化を意識してコーパス編纂に至るが、拡大円の話者に対し学習者 (learner)、使用者 (user) という用語を交換可能に用いておきながら、最終的には「学習者」のラベルをもって編纂を行っていること、2) Seidlhofer は明確に「学習者」ではなく「使用者」、それも "expert user" として使用者コーパスの構築を試みていることである。確認すべきは、同じ拡大円 (ICE は VOICE と同様のヨーロッパ諸地域も対象にしている) の英語を対象としながら、最終的になされたラベルはコーパス言語学の主流では「学習者」、ELF のコーパス研究では「使用者」と異なる。また Seidlhofer のこの記述から判断すると、「学習者」「使用者」の区分は社会言語学的要因ではなく、「話者の目指すべき目標が母語話者か否か」という心理的要因によるものであることに注意されたい。

この心理的要因による区分から、VOICE は比較的研究方向性の近い ELF 研究者からでさえも批判を受けることとなる (Prodromou, 2006, 2008)。Seidlhofer は上記の「使用者」の最終的抽出要件を心理的要因—第二言語話者が母語話者を目指すのではなく ELF 話者として英語を使用すると自己判断するか否か—に基づきコーパス編纂を行っており、以下のサンプルを提示した。

R: a German S: a French

Choosing a picture for the front of a calendar to be sold in aid of a third world charity

R: I think on the front xx on the front page should be a picture who-which only makes p-people to er spend money, to the charity.

S: yes.

R: and I think er yeah, maybe

S: I think a picture with () child

R: yeah, child are always good to

S: yes

R: to trap people spend money...

S: Yes. I think, erm, let me see, erm...

R: I don't know... but maybe we should er choose a picture who gives the impression ...

(from Jenkins, 2003, p. 130)

そして上記のスク립ト等に基づくコーパス分析から、彼女が成果として文法的非共通核 (non core)、即ち ELF forms として提示したものは、次のものであった (Seidlhofer, 2004):

3rd person -s,

definite/indefinite articles (omission)

interchangeable use of 'who' and 'which'

gerund in some expressions 'I look forward to see you.'

Tag questions (a universal tag, 'isn't it?')

上記のスク립ト、及び文法的非共通核を参照する限り、挙げられている諸点は伝統的コーパス言語学にて取り扱われてきた「学習者」的特長と大差ないように思われる。換言すれば、これらは ELF forms、即ち「頻繁かつ体系的に使用され、第一言語が異なる話者達に共有され、母語話者規範とは異なるがコミュニケーションを阻害しない言語形式」と同定され得るだろうが、この三単現の s の欠落、冠詞の欠落等は第二言語習得のみな

らず第一言語習得にも普遍的に起こりうる "developmental errors" として捉えられてきたものである (Ellis, 2008)。何を言語習得、及び発達と見做すかは上記のように複雑な問題ではあるものの (Cook, 1999)、スクリプト中のポーズ (p, people to er spend money)、自己修正 (self-repair: a picture who-which only makes...) 等から彼等が "expert user" (Seidlhofer, 2004) であるとは判断し難い。また研究参与者自身も "user" としては認めるものの、"expert" と捉えたか、疑義が残ろう。Prodromou (2006, p. 56) は VOICE の言語使用者の言語能力は「中位」レベルであった事を示唆している: "Some users will be of the kind of level indicated in Seidlhofer's samples, others will be lower but, more importantly, others will be of a higher level of proficiency."

この能力の層の妥当性を抱える VOICE、及びその主たる研究成果である文法的非共通核に対し、Prodromou (2006, 2008) が主として提起している問題点は、その非共通核の社会的容認度合いである。つまり、この伝統的に「学習者」的特徴と考えられるレベルが、学習者側が "successful" な二言語併用者に自己実現する上で、目標となるべきレベルか否か、という点である。確かにこれらを参照点として言語使用を体系的に構築したにせよ、多くの教育者、学習者がそのレベルを望むようになるかについては社会的現実性に欠けているようにも思える (Timmis, 2002; He and Zhang, 2010)。当論文で対象とする日本と同じアジアの EFL 国家である中国の大規模調査では、大多数の大学教員、大学生は、発音では中国語の影響を受けた "China English" を認める傾向にあるが、文法においてはいわゆる「標準英語」への順守、及び近似への志向が如実に見受けられていた (He and Zhang, 2010)。

これらの批判的見解の下に、Prodromou (2006) は心理的要因のみではなく、言語能力等の能力的要因、教育、職業、社会的認知等の社会言語学

的要因にもより、彼の述べる "successful" users の概念の構築を試みている。また筆者は「日本人英語使用者」を暫定的ではあるものの、「日本語を母語とし、日本で初等、中等教育課程を経て、仕事で英語を使用するもの」(藤原, 2006; Fujiwara, 2007b) と定義し、職業要件、それに付随する社会的認知を重要視し、コーパス編纂を行ってきた。今後、この定義の妥当性を検証する必要があるものの、日本のコンテキストでは、少なくとも社会言語学的意味において、「学習者コーパス」と「使用者コーパス」の区分は明確になると思われる。

4. 総括

本稿の主たる目的は、a) コーパス言語学、b) EIL、WE、ELF の各分野の歴史的背景を概括し、それぞれの経緯から生じる研究目的、研究領域の差を俯瞰し、両者の学際的領域の変化、及びその問題点、議論点を論じる事であった。その分野間の差異は近年着目される「使用者」の概念、即ち「学習者」、「使用者」の区分に反映されており、a) の伝統的主流を受け継ぐ領域では内円(NS) と外円／拡大円(NNS) 間、b) の諸英語論では内円 / 外円 (established/institutionalized) と拡大円 (performance, norm-dependent) 間で、使用者、学習者を区分している一方、EIL/ELF においては分け隔てなく、母語性、制度性に関わらず言語話者を使用者(時に学習者)と概念化しており、主として ELF コーパス構築のプロジェクトが行われてきたことを示した。しかしながら、ELF の分野内においても、「使用者」の構成概念は研究者により異なる見解がなされており、コーパス編纂時には注意を要する。国際英語関連領域ではコーパス言語学的手法による研究は未だ多くなされていないと指摘されているが (Bolton & Davis, 2006)、各分野間・内の見解の相違も一因と考えられる。

しかしながら、Cook (1999) が指摘するように、母語話者は定義上、生

まれ・育ち (bio-developmental) によるため、至極明らかなことは非母語話者が母語話者になることは論理的に不可能であり、第二言語使用者を育成する際には、範となり得る第二言語使用者の言語使用サンプルが必要となるのである。それ故、各拡大円国家で「使用者コーパス」を編纂し、教育利用することで、学習者に現実に合致したモデルを示すことは、言語的劣等感 (津田, 2006) が緩和、望ましくは解放へ向かうことが期待される上、学習者への英語母語話者では無く、「同国人英語使用者への統合的動機付け」が促進できると期待される。よって、今後一層拡大円における「使用者コーパス」編纂の必要性が高まるだろう。

References

- 和泉絵美・井佐原均・内元清貴. (2005). 『日本人 1200 人の英語スピーキングコーパス』 東京：アルク.
- 國弘正雄. (1970). 『英語の話しかた』 東京：サイマル出版.
- 齊藤俊雄. (2005). 「英語コーパス言語学とは何か」 齊藤俊雄・中村純作・赤野一郎(編) 『英語コーパス言語学—基礎と実践：改定新版』 (pp. 3-20). 東京：研究社.
- 齊藤俊雄・中村純作・赤野一郎. (2005). 『英語コーパス言語学—基礎と実践：改定新版』 東京：研究社.
- 齊藤兆史. (2000). 『英語達人列伝—あっぱれ、日本人の英語』 東京：中央公論新社.
- 末延岑生. (1990). 「第 11 章 ニホン英語」 本名信行(編) 『アジアの英語』 (pp. 257-286). 東京：くろしお出版.
- 末延岑生. (2010). 『ニホン英語は世界で通じる』 東京：平凡社.

- 鈴木孝夫. (1971). 「English から Englic へ」『英語教育』1月号, 4-5.
- 津田幸男. (2006). 『英語支配とことばの平等』東京：慶応義塾大学出版会.
- 投野由紀夫. (2007). 『日本人中高生一万人の英語コーパス—中高生が書く英文の実態とその分析』東京：小学館.
- 中山行弘. (1990). 「第12章 ノンネイティブ・スピーカー・イングリッシュ ニッポン人とアメリカ人の考え方」本名信行(編)『アジアの英語』(pp. 287-307). 東京：くろしお出版.
- 日野信行. (2003). 「『国際英語』研究の体系化に向けて：日本の英語教育の視点から」『アジア英語研究』(日本アジア英語学会編), 5, 5-43.
- 日野信行. (2005). 「国際英語と日本の英語教育」『英語教育の基礎知識：教科教育法の理論と実践』(pp 11-34). 東京：大修館.
- 日野信行. (2008). 「国際英語」小寺茂明・吉田晴世(編著)『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』(pp. 15-32). 東京：松柏社.
- 日野信行. (2011). 「WE・EIL・ELF—国際英語論における3種のパラダイムの比較」『新しい英語教育の方向性』(pp. 1-10). 大阪：大阪大学大学院言語文化研究科.
- 藤原康弘. (2006). 「日本人英語使用者コーパス：JUICE」『言語文化共同プロジェクト・電子化言語資料分析研究 2005-2006』(pp. 47-56). 大阪：大阪大学大学院言語文化研究科.
- 本名信行(編). (1990). 『アジアの英語』東京：くろしお出版.
- 矢野安剛. (1990). 「ノンネイティブ・スピーカー・イングリッシュ イギリス人の考え方」本名信行(編)『アジアの英語』(pp. 309-326). 東京：くろしお出版.
- Berns, M. (2008). World Englishes, English as a lingua franca, and intelligibility. *World Englishes*, 27, 3/4, 327-334.

- Bolton, K. (2004). World Englishes. In A. Davies & C. Elder (eds.), *The handbook of applied linguistics* (pp. 367-396). Oxford, England: Blackwell.
- Bolton, K. & D. Davis. (2006). A content analysis of World Englishes. *World Englishes*, 25, 1, 5-6.
- Cook, V. (1999). Going beyond the native speaker in language teaching. *TESOL Quarterly*, 33, 185-289.
- Cook, V. (2002). Background to the L2 user. In V. Cook (ed.), *Portraits of the L2 user* (pp. 1-28). Clevedon: Multilingual Matters.
- Cook, V. (2007). The goals of ELT: Reproducing native-speakers or promoting multicompetence among second language users? In J. Cummins & C. Davison (eds), *International handbook on English language teaching* (pp. 237-248). Kluwer.
- Crystal, D. (2003). *English as a global language, 2nd edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ellis, R. (2008). *The study of second language acquisition, 2nd edition*. Oxford: Oxford University Press.
- Fujiwara, Y. (2004). An intercultural pragmatics study on Japanese resistivity and American acceptability in refusals. *Intercultural Communication Studies*, 13, 2, 75-99.
- Fujiwara, Y. (2007a). A web-based survey on British pragmatics acceptability for Japanese refusals: Toward intercultural pragmatics. *Intercultural Communication Studies*, 16, 1, 137-152.
- Fujiwara, Y. (2007b). Compiling a Japanese User Corpus of English. *English Corpus Studies*, 14, 55-64.

- Fujiwara, Y. (2007c). Critical language testing on pragmatic tests: Are pragmatic tests really appropriate in Japan? *Asian Englishes*, 10, 1, 24-43.
- Fujiwara, Y. (2007d). Pragmatic development of Japanese Learners of English at the Junior High School Level: In the Case of Requests. *CASELE Bulletin*, 37, 41-50.
- Fujiwara, Y. (2010). Conference reviews: the 26th national conference of the Japanese Association for Asian Englishes. *Asian Englishes*, 13, 1, 90-94.
- Granger, S. (1998). Learner English around the world. In S. Granger (eds.), *Learner English on computer* (pp. 13-24). Longman.
- Greenbaum, S. (1988). A proposal for an international computerized corpus of English. *World Englishes*, 7, 3, 315.
- Greenbaum, S. (1996). *Comparing English worldwide: the International Corpus of English*. New York: Oxford University Press.
- Halliday, M. A. K., A. McIntosh & P. Strevens. (1964). *The linguistic sciences and language teaching*. London: Longman.
- He, D. & Q. Zhang. (2010). Native speaker norms and China English: From the perspective of learners and teachers in China. *TESOL Quarterly*, 44, 4, 769-789.
- Hino, N. (2001). Organizing EIL studies: Toward a paradigm. *Asian Englishes*, 4, 1, 34-65.
- Hino, N. (2009). The teaching of English as an international language in Japan: An answer to the dilemma of indigenous values and global needs in the Expanding Circle. *AILA Review*, 22, 103-119.
- Honna, N. (2008). *English as a multicultural language in Asian contexts: Issues and ideas*. Tokyo: Kuroshio Publishers.

- House, J. (1999). Misunderstanding in intercultural communication: Interactions in English as a lingua franca and the myth of mutual intelligibility. In Gnutzmann (ed.), *Teaching and learning English as a global language* (pp., 73-89). Tübingen, Germany: Stauffenburg.
- Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language*. Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2003). *World Englishes: A resource book for students*. New York: Routledge.
- Jenkins, J. (2006). Current perspectives on teaching World Englishes and English as a lingua franca. *TESOL Quarterly*, 40, 1, 157-181.
- Jenkins, J. (2007). *English as a lingua franca: Attitudes and identity*. Oxford, England: Oxford University Press.
- Kachru, B.B. (1976). Models of English for the third world: White man's linguistic burden or language pragmatics. *TESOL Quarterly*, 10, 2, 221-239.
- Kachru, B.B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the Outer Circle. In R. Quirk and H. G. Widdowson (eds.), *English in the world: Teaching and learning the language and literatures* (pp. 11-30). Cambridge: Cambridge University Press.
- Kachru, B.B. (1986). *The alchemy of English: The spread, functions and models of non-native English in the world*. Oxford: Pergamon Press.
- Kachru, B.B. (1992). *The other tongue: English across cultures, 2nd edition*. Urbana, IL: University of Illinois Press.
- Kachru, B.B. (2008). Symposium on intelligibility and cross-cultural communication in world Englishes: introduction. The first step: the Smith paradigm for intelligibility in world Englishes. *World Englishes*,

27, 3, 4, 193-296.

- Kirkpatrick, A. (2010). Researching English as a lingua franca in Asia: the Asian Corpus of English (ACE) project. *Asian Englishes*, 13, 1, 4-19.
- Leech, G. (1991). The State of the Art in Corpus Linguistics. In Aijmer, K. & B. Altenberg (eds.), *English corpus linguistics: Studies in honor of Jan Svartvik* (pp. 8-29). London: Longman.
- Leech, G. (1992). Corpora and theories of linguistic performance. In Svartvik, J. (eds.), *Directions in corpus linguistics: Proceedings of Nobel Symposium 82, Stockholm, 4-8 August 1991* (pp. 105-122). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Mauranen, A. (2003). The corpus of English as lingua franca in academic settings. *TESOL Quarterly*, 37, 513-527.
- Mauranen, A. (2006). A rich domain of ELF - the ELFA corpus of academic discourse. *Nordic Journal of English Studies*, 5, 2, 145-159.
- Mauranen, A. (2007). English as an academic lingua franca - the ELFA project. *Nordic Journal of English Studies*, 7, 3, 199-202.
- McEnery, A. M., & A. Wilson. (1996). *Corpus linguistics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Nelson, C. (2008). Intelligibility since 1969. *World Englishes*, 27, 3, 4, 297-308.
- Pakir, A. (2009). English as a lingua franca: analyzing research frameworks in international English, world Englishes, and ELF. *World Englishes*, 28, 2, 224-235.
- Platt, J. & H. Weber & H. Lian. (1984). *The new Englishes*. London: Routledge & Kegan Paul.

- Prator, C. H. (1968). The British heresy in TESL. In J. A. Fishman, C. A. Ferguson & J. Das Gupta (eds), *Language problems of developing nations* (pp. 459-76). New York: Wiley.
- Prodromou, L. (2006). Defining the 'successful' bilingual speaker of English. In R. Rubdy and M. Saraceni (eds.), *English in the world: Global rules, global roles* (pp. 51-70). London: Continuum.
- Prodromou, L. (2008). *English as a lingua franca: A corpus-based analysis*. London: Continuum.
- Schell, M. (2008). Colinguals among bilinguals. *World Englishes*, 27, 1, 117-130.
- Seidlhofer, B. & Berns, M. (2009). Perspectives on English as a lingua franca: introduction. *World Englishes*, 28, 2, 190-191.
- Seidlhofer, B. (1999). Double standards: teacher education in the Expanding Circle. *World Englishes*, 18, 2, 233-45.
- Seidlhofer, B. (2001). Closing a conceptual gap: The case for a description of English as a lingua franca. *International Journal of Applied Linguistics*, 11, 135-158.
- Seidlhofer, B. (2004). Research perspectives on teaching English as a lingua franca. *Annual Review of Applied Linguistics*, 24, 209-239.
- Seidlhofer, B. (2009). Common ground and different realities: world Englishes and English as a lingua franca. *World Englishes*, 28, 2, 236-245.
- Smith, L. (1976). English as an international auxiliary language. *RELC Journal*, 7, 2, 38-53. Also in L. Smith (ed.) (1983), *Readings in English as an International Language* (pp. 1-5). Oxford: Pergamon Press.

- Smith, L. (1978). Some distinctive features of EILL vs. ESOL in English language education. In L. Smith (ed.) (1983), *Readings in English as an International Language* (pp. 13-20). Oxford: Pergamon Press.
- Smith, L. (1981). English as an international language: No room for linguistic chauvinism. *Nagoya Gakuin University Gaikokugo Kyoiku Kiyō*, 3, 27-32. Also in L. E. Smith (ed.) (1983), *Readings in English as an International Language* (pp. 7-11). Oxford: Pergamon Press.
- Smith, L. (1983). *Readings in English as an International Language*. Oxford: Pergamon Press.
- Smith, L. (2004). From English as an International Auxiliary Language to World Englishes. In Otsubo, Y. & Parker, G. (eds.), *Development of a teacher training program* (pp. 72-80). Tokyo: Sōpueisha/Sanseido.
- Smith L. & J. Bisazza. (1982). The comprehensibility of three varieties of English for college students in seven countries. *Language Learning*, 32, 2, 259-269. Also in L. Smith (ed.) (1983), *Readings in English as an International Language* (pp. 13-20). Oxford: Pergamon Press.
- Smith, L. & C. Nelson. (1985). International intelligibility of English: directions and resources. *World Englishes*, 4, 333-342.
- Smith, L. & K. Rafiqzad. (1979). English for cross-cultural communication: The question of intelligibility. *TESOL Quarterly*, 13, 3, 371-380.
- Svartvik, J. (1992). *Directions in corpus linguistics: Proceedings of Nobel Symposium 82, Stockholm, 4-8 August 1991*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Timmis, I. (2002). Native-speaker norms and international English: A classroom view. *ELT Journal*, 56, 3, 240-249.